

菅原・千本桜・忠臣蔵（摘録）

楠山正雄

〈出典：「歌舞伎評論」 富山房、昭和 27 年 11 月〉

三大古典演劇

近世江戸時代の後期のわが演劇史のちょうどなかば頃にあたり、^{あやつり}操*¹がのぼれるだけの高い峠をのぼりつくして、あとの指揮棒を歌舞伎にゆずりわたすとき、ほんの偶然のように、人形浄瑠璃最後の総決算としてそこにあらわれたのが、「菅原」「千本桜」「忠臣蔵」と三つまで重なり合った名作であった。これがわずか二三年の間につづいて出て来て、貴重な演劇資料として歌舞伎に引き継がれた。おかげと一たん衰えかけた歌舞伎は栄養を回復して^{ふと}肥りつづけたが、操は三大名作を夕陽の輝きのよりにのこして、^{ようや}漸く衰え、歌舞伎からの輸血はかえって操を不健康にした。ただ「菅原」「千本桜」「忠臣蔵」は、歌舞伎に入って、増され^{みが}研かれ洗い上げられて、操と歌舞伎の長所を集成して、これが今もわが代表的な三大古典演劇である。

(中略)

義経千本桜

(中略)

第四段

序の切堀川御所、二段目の口稲荷前をうけ、四段目に来て、ふたたび「義経物語」の本筋に入る。それでもなお主人公は義経でなくて忠信、忠信でなく忠信に姿を借りた狐忠信である。

ここからはまったく『義経記』の世界である。『義経記』も、その巻五判官吉野山に入り給う事、以下四五章をそのまま借りた世界である。^{はつね}初音の鼓の^{つづみ}こと、^{みわり}忠信身替の^{みわり}こと、川くら（又は川つら）^{ほうげん}法眼と^{かくはん}横川^{かくはん}覚範の^{かくはん}こと、みな『義経記』にある。ただし法眼は覚範より弱いやはり^{かたきやく}敵役の一人である。^{げんくろう}源九郎狐の名は、大和国にそういう名の^{きん}霊狐の伝説をつたえたものによって、義経の^{ふかい}源九郎に^{ふかい}附会*²し、二人忠信の趣向は^{ようきよく}謡曲や近松*³の「二人静」からの思いつきであろう。そうして初音鼓の親子狐の相寄る奇瑞は謡曲の「天鼓」、それを翻案した近松の「天鼓」に、^{あすか}葛の葉伝説*⁴をなえ交ぜたものといわれる。^{いずも}出雲*⁵みずからもこれより先、享保十九年「^{あしや どうまん おおうちかがみ}芦屋道満大内鑑」を書いて、人間と狐の^{けしろう}化生した二人^{こうらん}葛の葉を^{こうらん}勾欄*⁶に躍らせている。「千本桜」が「大内鑑」を思い出し思い出し書かれた証拠に、敵役の公家が、「大内鑑」では左大将^{もとかた}元方、「千本桜」では、おなじく左大将^{もとかた}朝方で、モト、トモを引っくり返してつかっている。

(中略)

^{かわつらほうげんやかた}河連法眼館

河連法眼が軍議からかえって、鎌倉方に^{あすか}縁のつながる妻飛鳥の心を妻の兄の贋手紙によってためす。あの後武蔵坊弁慶は奥州の^{ひでひら}秀衡方へやっであり、^{しろうびようえ}亀井駿河二人だけが身方では心細いとおもうところへ奥州から四郎兵衛忠信がたずねてくる。忠信とは伏見稲荷で別

れた筈なのに、奥州から上って来たというのもふしぎ、あずけた静も初音鼓もまるで知らぬ顔なのもいよいよふしぎである。義経は大切な二つの宝のことをきくのにもまるで忠信がきょとんとしているの、むしゃくしゃして言葉荒く責めて忠信難場。そこへ別の忠信が静を伴って来たこと知らせる。しかし案内されて来たのは初音鼓をかかえた静一人であった。

義経のいいつけで静が一人、鼓をうつと、はたしてもう一人の忠信があらわれる。だがいつもの忠信とはもう様子がちがっている。義経からあずかった刀をぬいて静がおどすので、忠信は庭に逃げ下りて、おいおいに化生の本体をあらわし、昔、桓武天皇の御代、大和国に千年の功を経た牝狐牡狐めぎつねおぎつねの生皮をはって鼓とし、日にむかってうてば、狐は陰の獣ゆえ、水をおこし雨を降らせ、百姓は初めて悦の声をあげたので、初音鼓という、その鼓の子はすなわち私と名のって、これから長い物語*7になる。

とど義経のなさけで、初音鼓を賜わり、子狐は親狐と一しょいっしょに故巢ふるすによろこびかえる。狐は恩返しに通力を用いて、覚範以下の敵の衆徒をたぶらかす。おびき寄せられて来た覚範が、義経に本名をよび止められ、見あらわされて「実は」の名のりをする*8。

ここで八島（実は壇の浦）合戦の八艘はっそうとび*9の再演がある。

（後略）

《編注》

- * 1 操：操芝居、操浄瑠璃、人形浄瑠璃のこと。現在は文楽がこれを代表している。
- * 2 附会：こじつけること。ここでは、源義経の仮名けみょう（実名のほかに付けた通称）が九郎であることから、この狐と義経を関連付けていることを指している。
- * 3 謡曲や近松：謡曲は能、近松は近松門左衛門。
- * 4 葛の葉伝説：安倍保名に助けられた白狐が人間に化けて保名の妻となり、後の安倍晴明が誕生したという伝説。
- * 5 出雲：竹田出雲。江戸時代の浄瑠璃作者。「義経千本桜」の作者の一人。
- * 6 勾欄：建物・橋などにつけられる手すりや欄干。転じて劇場、舞台の意。
- * 7 物語：ある出来事の由来や状況、述懐などを、登場人物が他の登場人物達に仕方話で聞かせる演出。
- * 8 見あらわされて「実は」の名のりをする：正体を隠した登場人物が、他の者に正体を見抜かれたことをきっかけに、本名を名乗って正体をあらわす演出を、「見現しみあらわ」という。
- * 9 八艘とび：源義経が壇の浦の戦いで見せたと伝えられる、舟から舟へと次々に跳び移る動き。